

私はソーシャルワーカー

社会福祉法人横浜社会福祉協会

特別養護老人ホーム本牧ホーム

施設長 三枝 公一

「平成」が始まった年の春に、私は特別養護老人ホームに採用されました。就職したのは昭和40年代後半にできた横浜市内の施設で、当時6人部屋が残っていました。介護している職員をまだまだ「寮母さん」と呼んでいるような時代で、ソーシャルワークという言葉が現場に浸透している状況ではなかったと記憶しております。

入社したばかりの頃に先輩職員に言われた「学校の勉強と現場は違うよ」という言葉をうけて、利用者（クライアント）の相談を受けていました。「学校の勉強と現場は違うよ」と先輩職員が言った意図は、学校でいろいろなやり方（方法や技術）を習ってくるだろうが、そんな型にはまったことは現場では通用しないよ、ということであったと思います。

私自身も福祉関係の大学を卒業して一通りケースワークやグループワーク、コミュニティワークなどの勉強をしてきましたが、実践現場でどうやって使うのかもわからないままでした。

私は生活指導員（今でいう生活相談員）になりました。職場の中で介護職員や看護職員から期待されたことは「利用者の指導」でした。

一年もした頃、老人ホームでの生活は制限が多くて何かおかしいと思いはじめながらも、利用者を「注意」したり「指導」したりすることが続きました。生活指導員として「期待」されていることと、何かおかしいと思っている自分がどうもずれているように思えて仕方がなくなり、施設外のさまざまな研修会・講演会等に参加するようになりました。

結果、利用者への「注意」や「指導」ではなく、ソーシャルワークの知識や技術を駆使して利用者の生活を支えることが自分の仕事であると思い始めました。その後、多くの研修会等に参加し、知識や技術・アプローチ方法を学びました。学んでいるのですが、まだ何か足りないと感じていました。自分やまわりのスタッフが困難と思うケースを抱えるたびに、言葉では表現できない焦燥感に駆られていました。専門書を読みあさり、さらに研修会や講演会に参加して、自分の知識や技量のなさ、援助に対する不安を取り除こうとする作業を繰り返していました。

しばらくすると介護保険法が成立し、2000年に介護保険法がスタートしました。

当時も特別養護老人ホームの生活相談員でしたが、介護保険導入による制度の劇的変化

についていかなければならない時期があり、援助技術に関する研修会等に参加できない状況が数年続きました。

介護保険制度も導入当初に比べ少し落ち着き始めた頃、再び援助技術関係の研修に参加しようと思い、ある研修に申し込みました。2泊3日の宿泊研修でした。

当時の講師が研修の冒頭で言われた言葉が非常に印象深く、今でも考えさせられます。

参加するにあたり、「現場での体験」のレポートを提出しました。冒頭、その講師は何人かのレポートを読み上げました。いくつか読み上げていく中のひとつに「私（講習受講者）は本人のかたわらで一緒に泣き続けることしかできませんでした。この時私は援助者として無力感を感じていました。」という一文がありました。これを取り上げ、その講師はこれこそ「凡人の技」であると言いました。この時の文脈では、この「凡人の技」は肯定的な言い方の中で使われていました。

なぜ、援助者がクライアントの横で一緒に泣き続けることが肯定されなければならないのか？援助者としてその前になにかやれることがあったのではないか？援助者として無力感を感じることは、援助のための知識や技術が足りないから陥るのではないか？など、「対人援助技術研修」なのに技術っぽくない話からのスタートでかなり戸惑いました。

研修会が終了してもしばらくは悶々としていました。知識や技術を蓄え駆使することでクライアントのためになると考えていました。「医師が病気の治療をするように、援助技術によって助けることができるのではないか」、その考え方が間違っていると思えなかったのです。研修報告書も書くことができず、はっきり言って気持ちがすっきりとしない研修会でした。

すっきりしないままにしなくなかったので、講師の先生に会いに行こうと思いました。先生はある大学に所属していたので、アポイントもとらず直接会いに行きました。先生からは快く迎え入れていただきました。その上、先生が担当している学部生や大学院生のゼミにも参加させていただきました。なぜか誘われるがまま先生のところに通うようになりました。

この間、何人もの学部生から実習先でクライアントとかかわり、一緒につらい思いや一緒に楽しい思いをする体験から自分を見つめなおす話を聞きました。また大学院生が修士論文の執筆を通じて、クライアントとのかかわりをしほり出すように振り返っているところを目の当たりにしました。いわゆるクライアントと向き合う、クライアントを通して自分と向き合うということを積み重ねていたように思います。

今まで自分はクライアントと向き合っていたのだろうか、援助している自分と向き合っていたのだろうか。

実はこの時、「向き合う」こととどういうことなのかかわかったと思っていたのですがわかっていなかったようで、この後クライアントを傷つけてしまうことがありました。その経験を踏まえ、ようやく気が付いたことがあります。

ソーシャルワークの知識や技術だけでは解決できない、どうすることもできない状況に

陥ることがあります。その時に見えてくるのがクライアントと対峙する素の自分です。私がどんな研修会に参加しても足りないと思っていたものは、知識や技術により獲得したソーシャルワークの専門性と対極にある「素人性」だったと思います。ソーシャルワークの知識や技術を不要と言っているわけではなく、それはそれで大切なものだと思います。ただ、「凡人の技」や「素人性」は隣接領域に迎合せず、この先ソーシャルワークの独自性を担保するキーワードになるものと思っています。このキーワードを言語化していくことが、これからの私の課題になります。

